砺波カイニョ倶楽部会報　第72号
平成25年9月発行　発行者　砺波カイニョ倶楽部　代表幹事　柏樹直樹
事務局　富山県砺波市表町14-10　電話　0763－33－6588　　天野一男建築工房内

カイニョ管理―「剪定講習会」に30名参加

8月24日午前、となみ散居村ミュージアムで「カイニョ剪定講習会」を開いた。カイニョ倶楽部と砺波市農林課とミュージアムの三者で共催したもので30名が受講した。カイニョ倶楽部から8名参加した。幸い雨もあがり、実技講習もスムーズにいき、シュレッター（枝葉を細かく切り砕く機械）による実演処理も行われた。澤田農地林務課長が目的等の挨拶をし、造園協会の宗景　昭氏が実技前の基本について約４０分間説明した（別掲）。後、約２時間３班に別れ実習した。各班に講師（竹内富雄、宗景　昭、堀　浩一各氏）がつき指導した。伐った枝葉のシュレッター処理を鶴巻登志広氏等が行った。昼近くに講習会は終わった。

×　　×　　×

参加者の声　「暑かったが勉強になった」「大バサミの使い方を知った。我流でやっていたが基本をならえてよかった」「ミュージアムのエリアの樹木を教材に又やってほしい」「シュレッターを各家へ貸し使えるとよい」

×　　×　　×

講習会の模様を北日本ラジオが取材放送し、天野一男倶楽部事務局長がゲスト出演した。又、翌日、北日本新聞、富山新聞の朝刊が報道した。

（写真：剪定の基礎を学ぶ）

大いに参考になる「剪定の基礎」―宗景　昭氏の講演から

1．剪定の大切さ――庭木は限られた面積で目的をもち人工的に植えられたもの。景観、四季の変化、木の特徴をいかし、樹形をつくる。

2．剪定の目的――①健全な生育を促す。②植栽機能を維持――定期的に剪定し、樹高を維持、花を見る木は短い枝にする。お盆後にマツ、カシは剪定、強い剪定はしない。③景観美をつくる――他の木との調和を考え、大きさを整え、バランスをとる。④老化枝を若返らせる。⑤移植した木を根付きやすくする。

3．剪定の程度――①中透かし（剪定バサミ、ノコギリで大きい枝を切る）②小透かし（木枝を植木バサミで除く）

4．“忌み枝”――健全な形を維持するため剪定しなくてはいけない枝のことで、下記のものは切り落とす。①徒長枝　②立ち枝　③平行枝　④逆さ枝　⑤からみ枝　⑥切り枝　⑦幹吹き　⑧ヒコバエ

5．剪定と刈り込みの違い――剪定は各枝に目を配り、選んで切る。刈り込みは枝や葉に注目せず、刈り込みバサミで枝葉をまとめて刈り取る。
大バサミの使い方は片方の手は固定し、一方だけで刈り込むこと。刈り込みは芽吹きのよい勢いのあるときに行う。

6．樹木の生育リサイクル――春：芽吹き芽だし期。６月～７月：生育を止め、新芽が固まる。８月～１０月：枝や幹が充実。秋：生長を止め、葉を落とす。このサイクルを考え手を入れること。

7．樹木体内の養分状態――①１１月～３月（休眠期）養分が幹に集まる。②４月～７月（萌芽、開花、生長、繁茂期）芽が出て生長の止まる７月まで体内の養分は消耗され少なくなる。③８月～１０月：（充実～紅葉、落葉期）１０月まで成熟した葉によって養分がつくられ蓄えられる。

8．季節別の剪定の原則――各樹種で異なる。性質をみて対応する。
①冬季剪定――冬眠しているから枝を多く切っても支障がない。落葉樹はやりやすい。モッコク、シイ、マツ、ヒノキはわずかながらも生長しているので強い剪定は寒さで木を傷めたり、切り口がなおりにくいので強い剪定はしない。
②春季剪定――春はマツ等針葉樹の剪定によい。芽をふく季節で古葉を落とす。新葉の伸びる前にやること。マツのみどり摘みは新葉の伸びきった５月にやる。春の花の咲くツツジ、ツバキ、ジンチョウゲは花のあと剪定する。コデマリ、ユキヤナギは花後切らずにそのままにしておくと枝が上に伸びてしまうので開花枝を切り戻すこと。
③夏季剪定――６月～９月の剪定でカシ、モクセイ、カクレミノ、モチノキが適期
④秋季剪定――枝を強く切る事は控える。樹形をととのえる程度に。モミジのように休眠の早いものから剪定する。

９．庭木の形――樹形は主要な枝や葉で形づくる。樹冠と幹の形で特徴づけられる。

10. 剪定の原則――①込みすぎた枝の除去。②伸びすぎた枝の切り縮め。③必要以外の徒長枝の除去。④梢の一元化。⑤対生枝、束枝の整理。⑥同方向に出る同じ強さの枝の処理。⑦眺める正面に突き出した枝の処理。⑧逆さ枝、乱れ枝の処理。

11. 整姿・剪定の技法――

①枝おろし。（１）切る時期、針葉樹、落葉樹は春の萌芽前。特にミズキ、カエデは樹液が早く動くので、１１月～１月頃におこなうこと。常緑広葉樹は４月上旬の萌芽前。いずれも梅雨前に終わる事。（２）切り方　必ず幹に接して切る。なるべく傷口を小さくするように心がける。

②枝透かし　密生枝、からみ枝、徒長枝を取り去る作業で通風、日照をよくする。ウドンコ病、カイガラムシの病害虫を防ぐ。

12. 刈り込み――

①刈り込みのできる樹種、できない樹種――樹冠の全面を一様に刈り込みバサミで剪定することで、人工的な整形仕立てをすること。かりこみのできる樹種　イチイ、イヌツゲ、モクセイ、ヒイラギ、レンギョウ。　アベリア、ウツギ、ヤマブキのように春から伸びた枝に花芽をつけるものは刈り込まない方がよい。ジンチョウゲ、ツツジは刈り込む時期を注意すること。

②準備作業

（１）竹ぼうきなどで枯葉やクモの巣を払う。（２）長く伸びた枝は刈り込み仕上げ面より内部で剪定バサミで枝抜き。（３）枯れ枝で穴があいたところへはまわりからの枝を出させるようにする。

（写真：宗影氏の実技を聞く）

③刈り込み時期と刈り込み要領

刈り込み時期は、晩春から梅雨にかけ新梢が生長を休止する 6 月頃と、土用芽が生長を休止する初秋の 2 回。イヌツゲ、ピラカンサスのように徒長枝の出やすいものは時に応じて刈り込む。萌芽力は樹種によってちがう。花木は強い刈り込みをすると樹勢が低下し開花しなくなる。株物では、丈が高くなりすぎたものは途中から刈り込んで不定芽の萌芽で株の形を変えることもできる。蜜植、寄植えでは、晩春と秋の 2 回刈り込みが必要。刈り込み作業は刈り込みバサミを持った左手は、庭木の面に当てながら右手でハサミの反復運動を繰り返すように刈り込んでいく。

④生垣の刈り込み―――生垣の形を整えておくことがねらいで回数が多いほどよく晩春、土用、秋の 10 月の年 3 回やるとよい。生垣は、断面が長方形の角刈りをするものが多い。植え面と側面の交線がはっきりまっすぐ出るようにすることがコツである。上面、側面、裏面と仕上げる。また下の方（裾）を弱く上の方（天端）を強く刈ると下枝が枯れずに保つ。

⑤玉物の刈り込み―――上部から作業するが先に裾まわりを刈り、その刈り込み線に沿って頂上部へ向かって刈り込む。高い位置や丸く刈りこむ場合はハサミを裏返して刈り込む。

13. 摘心、摘芽―――摘心は、伸びすぎる枝を抑制するため、新梢の先端を摘む方法。マツのみどり摘みは、春に伸び出した新芽を 3 本ぐらい残し、指先で掻きとり、残したみどりの長すぎるものを 3 分の 1～3 分の 2 を指先で摘み取る。4～5 月に行う。

（写真：シュレッター―で枝の処理）